

～愛されて誇らしい川を目指して～ “通船川・栗ノ木川再生物語”

新潟県新潟土木事務所 計画調整課

ワールドカップサッカーの喧噪から早くも一年半。今、ビックスワン（新潟スタジアム）は、鳥屋野湖畔に白い羽を休めている。そして、アルビレックスのJ1昇格で地元新潟は祝賀モードに包まれ、年末セールと相乗りした大売出しが景気回復の一助たろうとしている。そして忘れてはならないもう一つの活性化の挺子が、今回紹介する通船川・栗ノ木川である。

1. 通船川・栗ノ木川とは

通船川・栗ノ木川とは、このビックスワンより更に下った「地図にない湖」の最下流部に位置する、所謂「人がつくった川」（大熊孝氏の言葉を引用）である。

通船川は、元阿賀野川の河口付近の河道であったが、享保16年（1731）の融雪洪水で松ヶ崎掘割が決壊し、本流と化した為、改めて旧河道のほぼ中央部分を掘削して運河としたもので、明治時代には文字通り、船が行き交ふ川であった。

又、栗ノ木川は、元々亀田郷内の排水を処理する為の排水路として造られたものであり、かつ時代の流れの中で旧栗ノ木川下流部は埋め立てられて道路となり、新栗ノ木川が掘削されて新下流部となり今

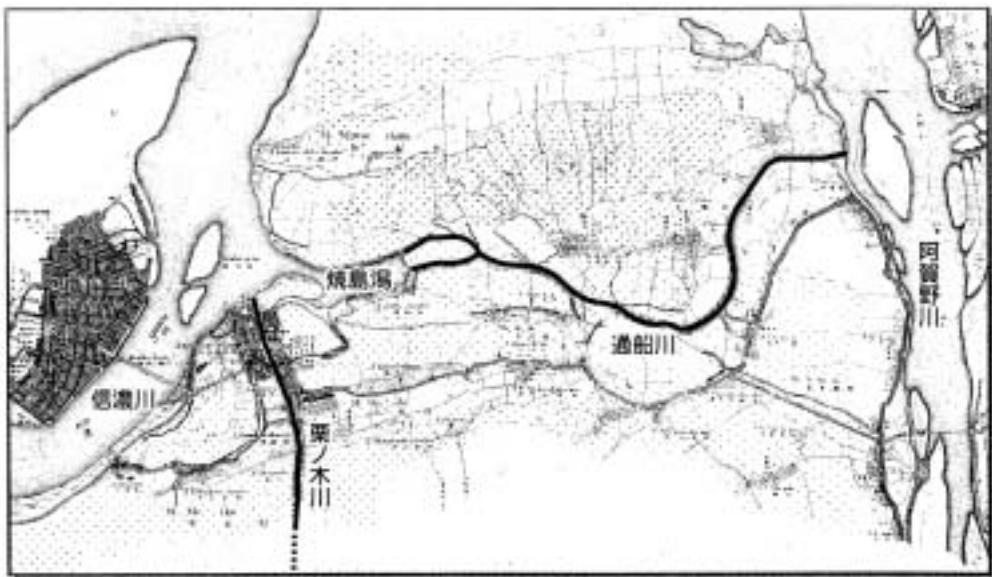
日に至っている。

この通船川・栗ノ木川流域の約17平方キロメートルは、約8割が市街地である。又、かつて重化学工業の勃興と併せて地下水汲上げによる地盤沈下が進み、ここは今約3割が海水面より低い、所謂ゼロメートル地帯となっている。元より、河道であるから、その地盤はやわらかくて弱い。昭和39年6月16日の新潟地震の折、堤防や護岸が決壊するなど被害が集中したのも、又、平成10年8月4日の豪雨の折に、浸水家屋1,742戸と大きな被害が出たのもけだし当然であった。



朱鷺メッセ 新山の下排水機場 山の下排水機場

写真－1 新山の下排水機場



1890年(明治23年)当時の地図

2. 治水事業の“精華” 山の下閘門排水機場

山の下閘門排水機場は通船川及び栗ノ木川下流部末端にあって、そこに溜まった水をポンプアップした上で信濃川へと排水している。建設費15億円をかけて昭和41年に完成したものだ。しかしながら、前述した様に、新潟地震で全域が被災したことから、その「災害復旧計画」において、これまでの「築堤方式」を改め、抜本的な対策として、河川の水位を人工的に低下させる、所謂「低水位方式」を採用した。この結果、流域内の排水は全てここへ集約される効果を生んだが、同時にそれは、生活・工場排水の集中化をも意味し、この二本の川はヘドロが堆積し、かつて「日本ワーストワン」の水質の川と呼ばれた。

他方、新設された新山の下閘門排水機場は、平成15年3月30日、竣工し、平山征夫新潟県知事、篠田昭新潟市長が記念植樹を行った。その遠望は、左に新築されたノッポビル「朱鷺メッセ」(国際会議場)を従え、右に旧山の下閘門排水機場を擁し、その様はさながら一幅の絵を観る様である。

8・4 水害を受けて作られた「河川改修計画」では、山の下閘門の内外水位差を図-1のように管理する事によって、通船川の常時維持水位はTP-1.65m(即ち海面より約2メートル低いもの)となっている。

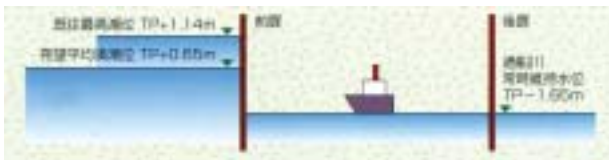


図-1 山の下閘門の内外水位差

又、県は、通船川、栗ノ木川を水質汚濁から守る為の一方法として浄化用水の導入を図った。

即ち、通船川については、阿賀野川より津島屋閘門排水機場の施設を介して自然流下により導水し、栗ノ木川は、鳥屋野瀧より竹尾揚水機場でポンプ用

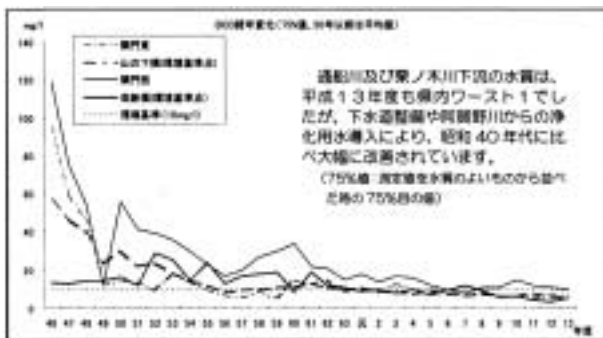


図-2 通船川の水質について(「つくり通信」より)

水により導水している。この結果、山の下閘門排水機場付近のBOD(生物化学的酸素要求量)は6~8ppmで水質環境基準(E類型)をクリアーしている。

3. 活発な市民活動

県が着々と県民の安全と安心、そして快適な暮らしを送る為の基礎工事を敢行している間、「野」に在っては、様々な市民団体が結成され、また活動が行われてきた。

(1) 通船川・栗ノ木ルネッサンス

平成6年1月、この地に「通船川ルネッサンス(後に通船川・栗ノ木ルネッサンスと改称)」が孤々の産声を上げた。仕掛人は星島卓美氏。コックから故里へUターンした53歳の男。風貌は品ある中にも鋭い眼光とさわやかな弁舌、そして抜群の行動力を持つ男のデビューだった。

会結成のきっかけは、星島氏が、新潟で開かれた「第8回水郷水都全国会議新潟大会」において発表した、川を活用した「水の都新潟」の10年後の再現を描いた「平成15年発行：にいがた川の道観光ガイドマップ」であった。この話題性が与って大きな効果があった。

(星島氏の提案)

通船川を拡幅し、水上バスによる通船川、阿賀野川、小阿賀野川、信濃川を回遊する船便を運航する。

(2) 新潟水辺の会

昭和62年ドキュメンタリー映画「柳川掘割物語」がきっかけとなって、「新潟の水辺を考える会」(その後新潟水辺の会に名称変更)が生まれた。「柳川掘割物語」とは、福岡県柳川市の掘割再生への物語を映画化したもの。大熊孝代表。

(3) 通船川草刈隊

横山通代表、草刈機を持って草を刈りながら通船川沿線緑化を目指す実践部隊。

(4) 花筏

市民団体が中心となって開催している春のイベントで、球根栽培のために摘み取った花で花絵を作り、筏に載せて信濃川や通船川を流している。

(5) 「通船川環境セミナー」

野鳥ウォッチング(鳥13種類観察) 通船川ウォッチング(魚・水生生物調査) 川舟ウォッチング(通船川上・中・下流で植物採取) 他

り植樹を開始している。

(3) 松崎地区、津島屋地区のワークショップ

松崎地区では、通船川の周辺で土地区画整理事業が開始されているが、新しいまちと一体となった通船川の川づくりのあり方や維持管理へのかかわり方を議論するワークショップを行った。



写真-4 松崎地区ワークショップの様子

また、現在護岸の補修の緊急度の高い津島屋地区での川づくりワークショップを行っている。



写真-5 津島屋地区ワークショップの様子

(4) やろってば「水と緑」の寄ったかり

「水と緑」を愛するグループ、全員集合

平成15年8月31日、「いい水辺・いい緑」の活動情報とイメージをお互い共有し、互いにほめ合うことを目的として第1回WSを開いた。



写真-6 第1回「水と緑」寄ったかりの記念撮影

6. 「市民会議」の成果と課題

「市民会議」設立から9回の「市民会議」、13回の地区意見交換会を開催し、誰もが自由に参加・発言できる形態で活発な議論を重ね、その結果として、「通船川・栗ノ木川下流」の将来のあり方と具体的な方針を示す「川づくり案」提言をとりまとめ、平成13年3月、再生検討委員会に提言した。

その後も個別のテーマ等について分科会等も交えながら様々な形で議論を継続的に進めている。

今後も、「市民会議」では、川づくり案の内容、個々の検討テーマについて分野別の具体的方針とその具体策を、時間をかけて深みのある議論を行い、合意形成を図っていくことが必要と考えている。

また、「市民会議」の形態も、その時代の社会情勢に応じ変化していくものと思われる。住民参加の川づくりを成功させるには、様々な施策を試行しながら折り合いをつけていく「見直し」を基本とした意見の調整システムを地域や行政内部につくり、育んでいくことが重要であり、市民会議もそのための場となるものと考えている。

最近、通船川がマスコミに取り上げられる機会が多くなった。知名度も群を抜いて来た。これは、「民」と「公」の協力の賜ものと言ってよいだろう。今後は「水と緑」をキーワードとするグループ間のネットワークの強化が課題である。

終わりに、本稿を書くに当って、通船川・栗ノ木川ルネッサンス星島代表を始め、亀田郷土改良区総務部長藤井大三郎氏、亀田町郷土資料館長三村哲司氏など大勢の方々にお世話になった。厚く御礼申し上げたい。

(参考文献)

1. 『亀田郷治水史』昭和41年 亀田郷水害予防組合
2. 『新潟地震誌』昭和41年 新潟市
3. 『通船川物語 ～愛されて誇れる川を目指して～』平成14年 通栗ルネッサンス